みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Comparative Analyses : Results : Local Organization 3400



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 船曳, 建夫<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.15021/00003671 |

# 集落・地域組織　3400

船　曳　建　夫*

1. 概観　　2. 分布の意味と問題提起

## 1. 概　　観

この大項目にふくまれている小項目の，東南アジア・オセアニア地域における分布図には一つの顕著な型が見られる。その代表的なものとして最初の項目である広場（3401）をまず見てみよう。

「広場」は73民族に見られ，その分布は，東南アジア大陸部の主として山地，そしてスマトラ島からジャワ島，スラウェシ島をかすめてニューギニアへと続く。そこからさらに，メラネシア島嶼部，ポリネシア中央のほぼ全域にわたって拡がっている。また，フィリピン北部と台湾全域にも分布が見られ，マダガスカル島にもその存在が5部族において認められている。逆に，その存在が認められていないのは，東南アジア大陸部におけるマレー半島，そしてボルネオ島，フィリピン南部という，東南アジアの地図でいえば，そのおおよそ中央部分である。また，オセアニアではミクロネシアにはまったく見られない。

この分布の形状を，東南アジア・オセアニアの全域において大づかみにのべれば，まず台湾とフィリピン北部(A1)，ついで，遠くマダガスカルをふくんで東南アジア大陸部 (A2) から，マレー半島を飛び越して，スマトラ―ジャワ―小スンダ列島―ニューギニア―メラネシア―ポリネシア，と円弧のように，また回廊のように連なる地域 (A3) ということになる。この分布をマダガスカルの地理的位置をまったく無視し，その他を単純な形に模式化すれば，つぎのようになる（図1）。

図中の A1, A2, A3, は文中のそれぞれに対応する。破線でかこんだ B の部分は，この「広場」という要素の分布が，見られない地域，すなわち，マレー半島，ボルネオ，フィリピン南部，ミクロネシアという広がりにあたる。

* 東京大学教養学部

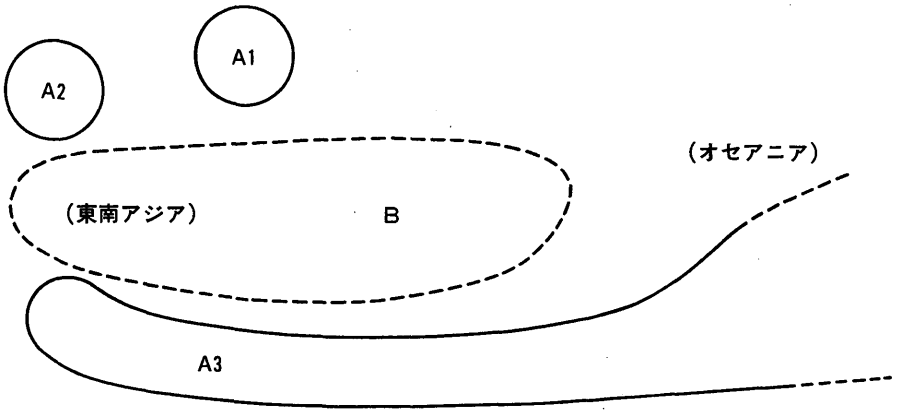



図1 「広場」の模式図（A型）

A1: 台湾，フィリピン； A2: 東南アジア大陸部（マダガスカルをふくむ)； A3: スマトラ，ジャワ，小スンダ，ニューギニア，メラネシア，ポリネシア； B: マレー半島，ボルネオ，フィリピン南部，ミクロネシア

この「広場」の分布が一つの典型であるとはすでにのべたが，これをA型（A1＋A2＋A3）とよび，他の小項目を見てみると，これに続く円型（環状）集落（3402），集塊村（3403）と集落の象徴的中心（3411）はこの型に合致する。

「円型集落」の見られる民族は15と少ないが，それが，上記の分布地域，A1の台湾，A2の東南アジア大陸部に各1民族，そして，A3のスマトラ，小スンダ列島，メラネシア，ポリネシアに，薄くではあるが拡がっている。そしてBの部分にはまったく見られないのである。同様に「集塊村」もA型の分布を示す。この要素は94民族の多きにおいて見られるが，マレー半島，ボルネオ島にはその存在がまったく欠如している。そのかわりに，上述のA1, A2, A3の地域には密に分布している。ただし，前2項目とは異なり，フィリピン南部，ミクロネシアにもその存在がみとめられることには注意をはらっておくべきであろう。このことはまたのちに触れる。「集落の象徴的中心」は「広場」とならんで，このA型の典型である。前述のAの地域にひろく分布しているが，逆にマレー半島，ボルネオ島，フィリピン，南部スラウェシ島は空白となっている。

さて，つぎの列状集落（3404）は，民族数が26と少なく，かつその分布は，東南アジアおよびオセアニアの一部にひろく散った形になっている。同様の分布を示すもの

に，水利組合（3406），季節的定住（3407），村落内地区（3409），村落連合（3410）の4項目がある。この4項目の要素の見られる部族数は順に 9，6，27，29，と数は少ない。出作り小屋（3408）もおなじ分布を示すがサンプル数は76民族と多い。

また，男子結社（3412）の認められる17民族と年齢階梯制の21民族とは似通った分布を見せている。すなわち，東南アジア大陸部の内陸と台湾，それにニューギニアからメラネシア島嶼部に限定されている。

そしてのこった項目の散村（3405）は，A型とやや反対の形を示しており，図1のBの部分すなわち，マレー半島，フィリピン南部，ミクロネシアにやや濃く，そして全地域に拡がっている。これまでのべてきたことを，分布の似通った項目とグループにわけることでまとめると，次のごとくに表わせる。

A型：広場，円型集落，集塊村，集落の象徴的中心

B型：散村

C型：水利組合，季節的定住，出作り小屋，村落内地区，村落連合

D型：男子結社，年齢階梯制

A型，B型とはそれぞれ，図1で説明したA，Bの地域に分布するものであり，C型，D型はそれぞれ，上述したように，全地域に散って存在するタイプ(C型)，東南アジア内陸部と台湾，それにメラネシアの2地域に分かれて分布するタイプ(D型)，を呼んだものである。

## 2. 分布の意味と問題提起

A型，B型でまとめた諸項目は，ある社会的意味をもつようである。すなわち，A型にふくまれる「広場」，「円型集落」，「集塊村」，「集落の象徴的中心」は，総合的に組み合わさって求心的，かつ集合的な形態の集落の存在を示していると考えられる。それと対比的にB型の「散村」は，拡散された，中心のない居住形態を指す。その居住の集中と散開の程度のちがいはあるが，およそ考えられる定住生活の居住形態を集村，散村，の二つに限定し2分することは可能であり，そのことを前提とすれば，東南アジア・オセアニアの全域が，この二つにわかれることは当然である。しかし，この2地域が，図1で表わしたように比較的まとまった形でわかれていることは注目に値する。このことを説明する方法として考えられる環境的要因と歴史（伝播）的要因の二つから何かいえるであろうか。

A型の分布を環境的要因から説明することは困難なようである。高地においても低地においても，また内陸部にも海岸部にもその分布は拡がっており，それはまた，温帯から熱帯までの地域をふくんでいる。

そこで，伝播の可能性を仮定してみると，いくつか興味深い点が指摘できる。第1に，Aの分布は，東南アジア大陸部を伝播の始点とすると，一方は台湾，フィリピン北部に，他方は回廊のようにポリネシアまで延びた，と考えられること。第2に，オセアニアのなかでミクロネシアが分布の拡がりにおいてメラネシア，ポリネシアと区別されていて，むしろフィリピン南部とつながっていること。そして，第3にB型としてあげられている「散村」は図1のBにおいて濃いが，実は，Aの分布域にも拡がっていて，この限りにおいて分布の中心はBで，そこからひろく伝播していったと考えられること。

以上の3点は，非常に限定された範囲での問題提起であって，解答を意図しているのではない。とりわけ前述の最後の点，「散村」の分布については，まず何よりも社会組織の段階を考慮しなければならない。その点では，「集村」の社会との歴史的先後関係，そして同一地域に共存している場合その二つの居住形態を持つ社会の相互関係など，文化要素の伝播とは離れた問題が多く出てくると思われる。第1のA型の伝播経路に関しては，大項目5200の「芸術」においても，似たような経路について述べている。また，第2のフィリピン南部とミクロネシアという「文化圏」は，さきに述べた「集塊村」の分布のなかにも感得されることであり今後の検討が期待される。

C型にふくまれる要素のうち，「水利組合」，「季節的定住」はそれを文化の中にもつ民族の少ない，やや特殊なものとわかる。逆に「出作り小屋」は非常に多くの民族に見られるが，その主たる生業との結びつきによって，内容は相当異なるものがあると考えられる。「村落内地区」，「村落連合」はその分布を巨視的にとらえる方法よりもむしろ，その要素を持つ民族・文化間の個別的比較に新しいことがらの発見の可能性がありそうだ。

最後のD型の分布は非常に明確な範囲を示している。すなわち，東南アジア大陸部の山地と台湾，それとニューギニアからメラネシア島嶼部，の2ブロックからなる。この2ブロックは，他の文化要素の分布においても見られることが知られており，類似の文化複合の存在を考えることができそうである。